

# 秋田県仙北地方における 水田利用再編対策について

田 沢 速 子

## Ⅰ はじめに

米の生産調整は昭和 45 年度に始まったが、それから 10 年たった今でも未だに米の大幅な在庫過剰は続いており、消費拡大も思うにまかせない状態で生産調整が続けられている。昭和 53 年度からは、生産調整対策として水田利用再編対策という名のもとに休耕田が認められず、なお一層のひきしめが行なわれている。農家は複合経営の確立をめざし、現在手探りの中で転作の定着化を迫まられているといった状態である。秋田県の米どころである仙北地方に焦点をあて、農家がこれにどのように対処していったのか、またその問題点と今後のあり方をみてみたい。

## Ⅱ 調査地域の概観

仙北地方は、大曲市・神岡町・西仙北町・角館町・六郷町・中仙町・田沢湖町・協和町・太田町・仙北町・南外村・西木村・千畑村・仙南村と一市十三町村からなり、秋田県の県南に位置している。（第1図）

第1図 研究対象市町村



水田面積は 29,584 ヘクタールと秋田県の 8 地区の中で最高の面積を占めている。横手盆地の北に位置しており、東部は岩手県との県境であり、奥羽山脈の山麓に広がる扇状地帯である。中央を雄物川が流れており、その支流である厨川・丸子川・川口川・真昼川・斉内川・玉川があり、他に田沢疎水・第二田沢疎水が貫流し、これが灌漑水として用いられている。

## Ⅲ 仙北地方における水田利用再編対策の実態

昭和 45 年度からの各市町村の対応は（第1表）のとおりである。全体として 100 %以上の達成率を

(第1表)

## 面積及び達成率

市町村別	区分 年度	目 標 面 積										面 積 達 成 率									
		45	46	47	48	49	50	51	52	53	45	46	47	48	49	50	51	52	53		
大曲市		302	702	557	504	128	63	78	68	255	112	61	64	55	80	114	66	82	105		
神岡町		93	189	162	148	63	24	29	20	77	111	92	83	76	97	113	38	77	109		
西仙北町		168	399	340	310	103	48	24	44	173	127	90	95	110	109	116	66	102	114		
角館町		104	235	197	179	62	24	30	48	140	189	112	139	109	84	121	72	102	105		
六郷町		73	170	140	125	32	16	18	20	73	125	71	72	55	81	119	54	66	112		
中仙町		228	512	420	379	80	42	49	49	220	120	91	113	111	65	112	65	129	110		
田沢湖町		150	351	288	263	135	76	69	75	160	165	103	131	120	90	137	107	125	113		
協和町		130	296	263	239	35	28	22	36	182	111	95	97	97	106	118	62	120	120		
太田町		182	409	350	320	148	55	66	63	240	130	73	92	118	74	116	87	110	128		
仙北町		152	356	285	259	29	10	15	25	123	118	65	50	37	79	140	54	104	107		
南外村		72	166	144	129	80	31	52	52	95	154	116	115	125	89	190	94	102	126		
西木村		82	182	143	126	46	31	20	16	79	121	70	99	130	89	103	55	126	115		
千畑村		174	416	367	335	48	26	40	70	220	115	56	39	35	92	115	129	113	107		
仙南村		185	421	343	310	26	20	25	31	170	97	35	30	20	92	100	54	129	119		
小計		2,095	4,804	3,999	3,626	1,015	495	537	617	2,213	125	77	83	81	86	122	78	108	114		

みなかった。つまり割り当て数量に対し対処できなかった年度が多い。昭和 45 年度は、農家が将来の営農に不安を感じながらも、現実の米の過剰を認め、早急に需給バランスを回復するためと食管制度堅持のために、目標数量を大きく上回る協力的態度を示したと考えられる。ところが、昭和 45 年度は、転作率がわずかに 28.4 %と低率で、稲作栽培の再開を考えて単純休耕で対処するケースが圧倒的に多かった。翌年から達成率が低かったのは、単純休耕の結果、土地が荒廃する、収入が減少するという深刻な問題にゆきづまり、非協力的態度がとられたと思われる。昭和 49 年度～昭和 52 年度まで目標面積が少ないのは、一応のめどを政府でうち出しているものの農民に自主的にやらせたという形をとっているからである。昭和 53 年度には、水田利用再編対策がスタートし、農民は転作にとり組むことが強制され、かなりきびしいものとなった。目標面積は 2,213 ヘクタールで実施面積は 2,512 ヘクタールで達成率が 114 %, このうち管理転作、通年施行等を除く完全なる転作面積は 2,276 ヘクタールとほぼ転作で対処された形となった。主要転作物は、一番多いのが飼料作物で次に大豆・野菜の順である。この 3 つで全体の 80 %も占めている。このうち野菜はほとんど自給用として消費されている。

## Ⅳ 各市町村の対応

仙北地方で一般に高い達成率をしめしている町村としては、田沢湖町・南外村・太田町などがあげられ、逆に低い所では、仙南村・大曲市などあげることができる。ここで、それぞれの対応をみるために、田沢湖町と仙南村の場合を取りあげ、また他市町村にみられなかったホップ栽培を行なっている太田町に焦点をあてて再編対策をみてみたい。

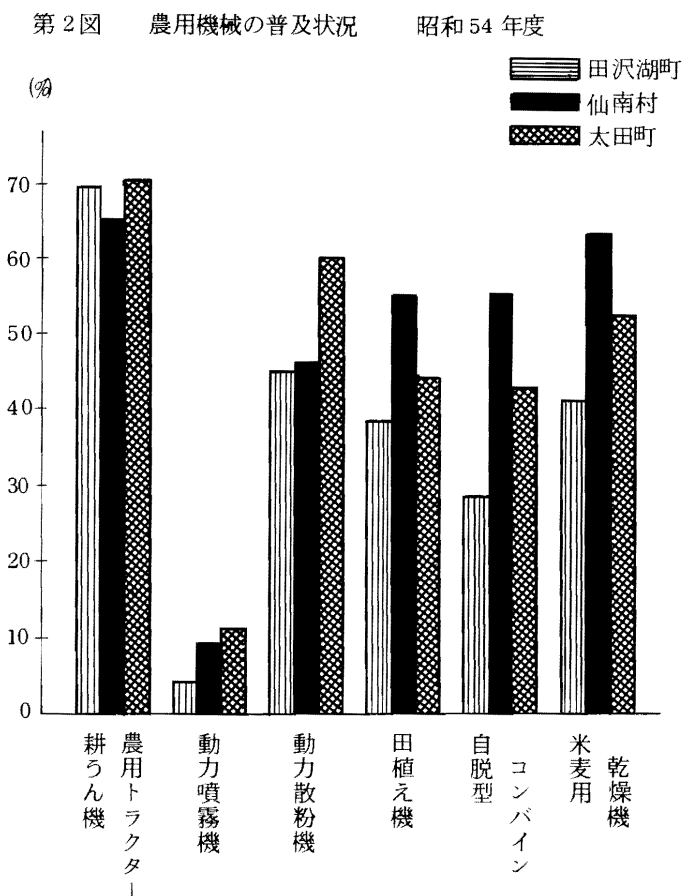
## (1) 田沢湖町の場合

全戸数に対し、農家数は 40 %であり、第3次産業に従事するものが第1次産業に従事するも

のと同じくらいである。それというのも田沢湖町は、田沢湖や八幡平で知られているように観光の町であり、また町の総面積の約 80 %を占める山林を基盤とした林業・工業の発達、そして玉川水系の豊富な水量を生かした水力発電の地帯として著名であり、基幹産業が農業であるというものの、一戸当たりの水田面積も 1.28 ヘクタールであり、他町村に比べ第二種兼業農家が多い。転作物は 64 %もを飼料作物でしめている。これは、県営・町営で牧場に乳牛・役肉用牛が飼育されており酪農に力が入れているが、その飼料を今まで他町村からとり入れていたのを自給的に消費しようとするものであった。ゆえに、米作から特殊林産物や特産野菜葉たばこなどの工芸作物・畜産などを導入した複合経営の振興が図られており、全体的に達成率が良いものと考えられる。

## (2) 仙南村の場合

仙南村は他市町村より一般に低い達成率をしめす。これは、耕地面積の 90 %以上が水田であり、横手盆地にあり反収も多い。一戸当たりの平均水田面積は 1.5 ヘクタールであり、第一種兼業農家が多い。特に仙南村は田植え機械・コンバイン・乾燥機などの農業機械の所有が多く、農業への資本投下が大きい。(第2図)



このことから複合経営へといっても、やはり米一本に頼ってしまう農民の気持ちがかうかがわれる。近年達成率を 100 %うわまっているのは、夏期施行のためである。仙南村は大きく、金沢地区・飯舘地区・金沢西根地区にわけることができるが、夏期施行は金沢地区で行なわれていて、53年・54年・55年と3年にわたって圃場整備がやられている。この地区を3つの区域にわけて行なわれているが、年々面積が減少している。この圃場整備は夏期施行であるため、秋

になって何か作物を植えるにも、大豆などは6月頃にまく必要があり、成育期間が短くて収穫できるといのでソバを植えている。互助制度であり、三地区順々に圃場整備を行いそこに転作している。だから仙南村も100%以上の達成率をみたのである。しかし、年々圃場整備が少なくなっそいるので、今後達成率も減るであろうし、55年度で終わるため、その後は生産調整に対してあまり協力しないといった消極的態度が予想される。

### (3) 太田町のホップ栽培

岩手県二戸市のサッポロビール工場との契約栽培である。3つの生産組合をつくっており、共同で栽培されている。ホップ栽培は労働が大変であるが、二年目からは収穫量もふえるので米にみあった生産をあげることができる。このため、町としてもこのホップ栽培を主たる転作物としておし進めていこうとする方針である。しかし契約栽培であるため、町の希望どおりの栽培面積をふやしていくことができないというのが問題であるが、今のところは栽培面積もふえており、米とホップの複合経営に期待がかけられている。

## V 問題点と今後の見通し

以上のことから、水田利用再編対策の問題点と今後のみとおしをみてみたい。再編対策に対する農家の態度というのはまちまちであるが、一般に米だけに頼っているという姿がうきぼりにされたといってよい。だから53年度になって新たな対策への対応としても対処しきれず、青刈りになってしまった例が非常に多かった。米作に頼りすぎている原因から問題点をひろってみると、

(1) 仙南村のように農業機械の導入により、米作への資本の投下が大いことがあげられる。

(2) 大豆栽培は多く行なわれているが、労働力が非常にかかる。これは機械の導入により解除されるが、農業機械の他に大豆栽培のために機械を導入することは経済的に困難である。また、大豆は三等以上の品質でないと価格補償の対象にならないため、品質の面でも問題がある。

(3) 飼料作物は青刈りが多いが、奨励金が高いというものの活用面で問題がある。青刈り稲は、そのまま多量に食べさせるわけにはいかないので乾燥させる必要があるが、それに非常に手間がかかる。このため飼料としてはほとんど活用されていないのが現状である。

(4) 以前は、排水不良の田や日かげ地などが減反の対照となっていたが、今はかえって排水・土壌の良い田など条件の良い水田が減反されている。それでなければ転作物もよく育たないからである。

今後の見通しとしては、現在一律に生産調整をしているがそれからぬけきり、互助制度などである地域でまとめて転作するといったある意味での共同化が必要のように思われる。大きな水田の中の一〜二枚を減反したところで、それは政府にとっても農家にとってもマイナスであり、効果はあがらないと考えられる。しかし、集団転作という形をとるのは、現状では難しいように思われる。また、今後さらにきびしくなるであろう再編対策に対して、転作の定着化をいち早くつ

けることが大切であると考えられる。このためには、転作物を緊急の対策としてでなく、長い目でその転作物をみていく必要があると思われる。

本稿を作成するにあたりまして、弘前大学社会地理研究室・横山弘先生、水野裕先生に多大の御教示をいただきました。また大曲市総合庁舎並びに各町村役場産業課、現地調査にあたっては多くの農家の皆様の御協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

#### 参 考 文 献

- 金崎肇・北林吉弘・古川春夫・須山盛彰（1971）：「北陸米作地域における生産調整政策に対する地域的対応」 地理学評論 44 - 12
- 畑沢鉄夫（1971）：「大曲・仙北地方における米の生産調整概報」 秋田地理
- 梶井 功（1979）：「稲作転換と日本農業の方向」
- 井上一郎（1978）：米づくりの村 家の光協会